

## 令和元年度 そに森の子キャンプ

### 1. 趣旨

曽爾の豊かな森林環境を舞台に、冒険的な活動等を通して森林環境教育プログラムを行う。小さな成功体験、やり遂げた時の達成感を積み重ね、へこたれない力（レジリエンス）の育成に重点を置く。

### 2. ねらい

- ・低年齢（小学校低学年）の子どもに自然体験を提供する機会とする。
- ・森林環境教育プログラム実践の機会とする。
- ・へこたれない力（レジリエンス）の育成に重点を置く。
- ・ボランティアリーダーのキャンプカウニングスキルを育成する機会とする。

### 3. 日程

夏のキャンプ：7月6日（土）～7日（日）

秋のキャンプ：11月16日（土）～17日（日）

クリスマスキャンプ：

12月24日（火）～25日（水）

冬のキャンプ：2月1日（土）～2日（日）

### 3. 対象者

小学1年生～3年生

### 4. 参加者（カッコ内は応募者）

夏のキャンプ：22名（168名）

秋のキャンプ：19名（69名）

クリスマスキャンプ：23名（24名）

冬のキャンプ：20名（34名）

### 5. プログラム

自然の家内にある雑木林を職員が手入れし、その後、参加児童にも作業に加わってもらう「遊びの森」づくりを主な活動内容とした。夏と秋は主に「広場づくり」となり、クリスマスと冬は、出来上がった広場をプレイパーク化していく作業を担った。

のこぎりと剪定ばさみを参加児童に使用させた。のこぎりは両手で持つこと、近くに必ずリーダーがいるようにし、一人で使わないことが約束。安全は自分自身で守ることを徹底し、そのうえでリーダーやスタッフが見守るように心掛けた。特に活動はリードせず、参加児童が主体的に「やること」を見つけて動いていく。むしろリーダーは、子どもたちに導かれて一緒に遊びにはまっていく。このような非構成な活動を中心に行った。

## スケジュール

### ●1日目

はじめの会 オリエンテーション

お絵かきタイム「どんなことして遊ぶ？」

昼食

森遊びタイム

夕べのつどい

夕食

キャンプファイアー（キャンドルファイアー）

グループタイム

### ●2日目

朝のつどい

森遊びタイム

昼食（野外炊事の回もあり）

お絵かきタイム「どんなことが楽しかった？」

終わりの会



## 6. 参加者の声

- ・いろいろなどうぐがつかえてたのしかった。あなほりがたのしかった。みなさんがやさしかったです。  
2年生女子
- ・とても楽しくてよかったです。4、5、6年生の森の子キャンプを作ってほしいです。メタルマッチでのひおこしが楽しかったです。  
3年生女子

## 7. 保護者の声

- ・言葉づかみが優しくなっていました。大人への接し方もマイルドになりました。自分から進んでお手伝いをしてくれるようになりました。「何かすることない?」「することなくてつまらん」ではなく、「これしていい?」に変わりました。自分の気持ちをうまく伝えられるようになったと思います。  
1年生男子保護者
- ・今までの外泊はお姉ちゃんと一緒にだったり、お友だちがいたので不安な表情は見せなかったけど、今回は初めて知らない子と寝たりするので少し不安があったみたいです。普段は甘えん坊な所もあるので少し心配な気持ちもあったけど、帰ってきた姿を見たら楽しんできたのがわかり、参加させて良かったと思いました。「絶対また行く」という言葉を聞いて甘えん坊から少し成長したなと思いました。  
2年生女子保護者

## 8. スケッチによる変化

- ・児童Aの場合

<事前>



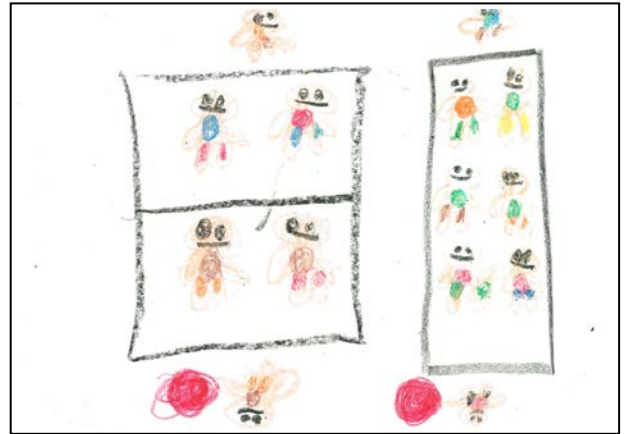
<事後>



森で友達と遊ぶという大まかなイメージから、体験したことにより、人の絵が大きくなり表情がはっきりした。たき火のインパクトもあったようである。

- ・児童Bの場合

<事前>



<事後>



活動前は、外遊びといえばドッジボールのイメージだったが、木を切ったことのインパクトが大きかったのか、一面の森の絵になった。

## 9. まとめ

あまり細かなプログラムをつくらず、大枠のみ決めて、内容は参加者の自主性に任せたキャンプを心がけた。そのほうが、今回のねらいに沿ったものになると考えた。

リーダー達は、自分がどのようにかかわればよいのか、安全管理はどう行うのか、グループの一体感をどのように作っていくのか、についてたいぶ苦労したようである。「参加者にとってよい体験にする」にはどうしたらよいか、キャンパーズファーストを常に基本に置いて考えてもらった。その結果、最後のキャンプではゆとりをもって参加者にかかわることができていた。

各回とも参加者すべてを受け入れられないくらいの応募があった。ニーズもある。次年度は幼児にも対象を広げ、子供たちの様子を観察しながら、さまざまな考察を続けていきたい。

(企画指導専門職 高瀬宏樹)